

いの流水俳壇

「当季雑詠」

夕刊にたたまれいる冬隣

友草 水月選

間 浩太

(評)朝夕は冷えるようになった。夕刊が配達されてきたので、読もうとして開くと冬がもう隣に来ていると感じたのである。間さんの心象的な独特の手法である。新聞に挟まれた冬物の広告(チラシ)記事が冬を感じさせる内容だったかもしれない。俳句は見たこと感じたことを全部言ってしまう

ことは駄目であり、読者に考える余韻を残すことが句作りの妙味であると言われる。なお季語としては、春隣、夏隣、秋隣がある。

○大原女三人行きて冬隣
 庄中 健吉

山里の朝もやを解く稲架

川村 博子

(評)秋となると山峡に朝もや(霧)がたちこめ棚田や家々を覆い隠す。太陽が登るにつれてそのもやも次第に薄れ棚田の稲架もぼんやりと姿を現す。里山の美しい自然が目に見えるようである。

稲作の機械化が進み、乾燥させる稲架が不用となり木や竹で枠を組む里山の風物詩はほとんど姿を消した。

季語の「霧」「霧」は氣象学的には見通しが1km未満が霧で、1km以上の状態を霧と言う。

○月山といえ一切の霧の中

岸風 三樓

ふと過ぎて木犀の香にもどりけり

大川 節弥

(評)散歩をしていると、ふと木犀の清々しい香がする。木犀の香に呼びもどされ、どこにあるだろうかと引き返したのである。この句の成功は下七の「香にもどりけり」の表現の上手さである。

木犀は中国原産の常緑樹で、節分に門に差す「柂」も同じ仲間。仲秋のころ、白色、橙黄色の小花を多数つけ、白色は銀木犀、橙黄色は金木犀と呼ばれている。開花期には強い芳香を放つ。庭木としてよく植えられている。

○行き過ぎて金木犀は風の花

木村 敏男

乗ひろいいがの中から三兄弟

石原 静

(評)栗拾いに行つた。落ちた栗の毬がはじけ、中に大きな栗の実が三兄弟のように並んでいた。毬栗の中の三粒を三兄弟というのは擬人法と言ひ、俳句ではあまり使わないう表現技法であるが、なんだか温かくほつとした昔を思い出させる句である。今は自然の栗林が少なくなつて栗拾いをする野山もないのは残念である。なお石原さんはこの度入会された。心身健康のためにも是非頑張つてほしい。

○昼飯に少し間のあり栗拾う

赤星水竹居

二句抄

紅葉の手大きく振つて運動会
 いちようの実落ちて年寄る庭簾
 生きてゆく今日を大事に秋の暮
 衆山子にも美人不美人ありにけり
 無事に辿りついたか雁の群れ達よ
 日本酒の恋しくなつてきた寒露
 家系図に曾孫書き足す秋灯
 遍路墓阿波と記せり芒の穂

片岡 包女

小野川町子

竹崎たかひろ

岡村 嘉夫

岡村 嘉夫

草の穂の似合う玄関友むかえ
 今朝の風金木犀もつれて来し
 凜として廃屋の庭秋さくら
 怒り顔笑い顔あり甘藷かな
 落葉踏む小さき犬の小さき音
 萩の揺れは更に揺れにけり
 坂道をころび来るごとちろろ鳴く
 足腰の冷感じけり星月夜
 あえぎつ登る坂道大花野
 団らんの仲間に入る虫の声
 戦争が牛歩で迫る秋の暮
 恙なき一日見廻すお茶の花
 無人秋の灯遠き家路かな
 さやさと秋風たちてトンボ消え
 試歩伸ばす一歩一歩に深む秋
 白壁もヘッドも四角窓の秋

國田 貞子

森岡 照月

津田 久美

田蔦恵美子

井上 松代

間 浩太

川村 博子

大川 節弥

石原 静

友草 水月

秋深き隣は何をする人ぞ

松尾 芭蕉

秋も深くなつた隣はどんな人が住みどんな暮らしをしているのだろうか。この句は1694年芭蕉51歳の作である。芭蕉辞世の句とも言われている。逝去の10日程前の句で下痢で体調を崩し独り寝をしていた。小さな音を立てた隣の人は何をしていたろうと思つた。疲れが重なり、気持ちも弱つていて死の予感があつたかも知れない。芭蕉には隣の音が寂しかった。人恋しさと懐しさと孤独感であつた。秋の深まりと共に人への恋しさと煩わしさを、芭蕉を身近に感じる一句である。

次 題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

画 8933-2012
 いの町3597

有料広告

医療法人 森木病院

光生会

院長 森木 光司

- 内科
- 外科
- 小児科
- 循環器内科
- 消化器内科
- リハビリテーション科
- 人工透析

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014